

CHOMSKY
Ideas and Ideals

チョムスキーの 言語理論

その出発点から最新理論まで

ニール・スミス & ニコラス・アロツト
今井邦彦・外池滋生・中島平三・西山佑司 訳

進化と成長を続ける
チョムスキー理論の全体像を把握し、
活用するための類例のない入門書。

現代に大きな影響を与え続けているチョムスキー生成文法の出発点から最新の理論に至るまでを、きわめて分かりやすく解説。内容を大幅にアップデートした原著第三版から政治観の章を除き、言語理論およびその周辺に絞って翻訳。

新曜社

チョムスキーの 言語理論

その出発点から最新理論まで

ニール・スミス & ニコラス・アロット
今井邦彦・外池滋生・中島平三・西山佑司 訳

新曜社

CHOMSKY
Ideas And Ideals

Third Edition

by Neil Smith and Nicholas Allott

© Neil Smith & Nicholas Allott 2016
© Cambridge University Press 1999, 2004

The translation of *Chomsky (3rd edition)* is published
by arrangement with Cambridge University Press
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

我が友に捧ぐ（スミスとアロットより）

親愛なる友へ、ここでは友ということばを
常より広い意味で使う：

妻、いもうと、仲間、親戚、

学校の男友だち、女友だち、

1度しか会ったことのない人々、

わたしと一生つきあいのある人々：

ただし、わたしとの間に、たとえ一瞬にせよ、

相通ずる区分けが画かれた人々、

明白な和みの弦が施された人々であれば。

…時を忘れるな、

封蝋が固まる前の時を。

プリーモ・レーヴィ 『わが友へ』(Levi, 1990:5) より

訳者まえがき

この書は、Neil-Smith & Nick Allott, *Chomsky: Ideas and Ideals*, Cambridge University Press, 第3版 (2016) の日本語訳である。この新版では初・第2版の著者スミスに新進気鋭の学者アロットが加わり、増頁に伴い内容的にも新鮮、斬新なものとなっている。

チョムスキーに尊崇の念を抱こうと、逆に反感を抱こうと、彼が言語学に、そしてそこから輪を大きく広げ、人間研究はいかにあるべきかについて革命をもたらしたことに、異論はないと言ってよい。チョムスキー理論は、認知科学、心理学、哲学、神経生理学、コンピューター・サイエンス、数学、さらに、特に最近では、進化論・遺伝学の分野にも大きな影響を与えている。

科学の諸分野におけるそのような「巨魁」を巡る著書は、当然のこととして、数多い。その中から、我々訳者が本書の訳出を選んだ理由は何か。チョムスキーが最初の公刊本 Chomsky (1957) を出版したのちも、欧州ではイタリアと当時の東ドイツを除けば、ほとんど反応がなかった。特にイギリスでは、ファース (John Rupert Firth, 1890-1960 : 今井 (2001) “ファース”, 『言語』2001・2別冊, pp.66-67 参照) を創始者とする、明確な原理を分け持たない、緩いまとまりしか持たなかつたいわゆる「ロンドン学派」と外部から呼ばれたグループがあるのみだったせいもあったろうし、昔から経験主義 (empiricism, 知の源泉を感覚的経験に求める立場) の盛んなイギリスでは生成文法のような合理主義 (rationalism, 知の源泉を理性に求める立場) を受け入れる用意がなかつたとも考えられる。この分析の当否は措くとしても、本書の第一著者スミスは、イギリス人学者としては極めて早い時期から生成文法の正しさに気づき、サヴァン (知的障害を持ちながら、特定の分野に限って極めて優れた能力を発揮する人) に関する自らの共同研究 (Smith & Tsimpli, 1995) によって人間言語のモジュール性 (第2章参照) の性格付けに寄与し、また生成文法に関する著作を数多く著した。

生成文法は、誕生以来変化と成長を続けている。たとえばミニマリスト・プログラムという、生成文法における画期的パラダイムが公表されたのは、Chomsky (1992d, 1995b) においてであるけれども、この研究方針にさえもその後大幅な変化が生じた。これら生成文法内のさまざまな変化・発展を記録・解説するため、スミスは新進気鋭の学者アロットに共著者として加わってもらうことに決め、2人の超人的な努力によって、本書第3版は紙数を大幅に増やし、内容を最大にアップデートしたものとなった。すなわち読者諸氏は、チョムスキー理論の出発点から現行理論に至るまでを、きわめて分かりやすく教えてくれる、他に類を見ない「生成文法入門・活用書」を手にしておられる

こととなる。

生成文法登場までアメリカ言語学界を支配していた構造言語学 (structural linguistics) のいわば総帥だったブルームフィールド (Leonard Bloomfield, 1887-1949) は言語を「1つの言語共同体で生まれる発話の総体 (the totality of utterances that can be made in a speech community)」(Bloomfield, 1928) と捉えていたし、デンマークの言語学者イェルムスレウ (Louis Hjelmslev, 1899-1965) は、言語理論は「網羅的 (exhaustive)」な記述を行わなければならないと主張している (Hjelmslev, 1961)。現今では経験主義言語学者のエヴァンズ (Nicholas Evans, 1956-) とレヴィンソン (Stephen Levinson, 1947-) がその共著論文 (Evans & Levinson, 2009) で、やはり「総体主義」的主張をしている。

もう一つの捉え方は、「言語」を習慣・しきたりとする見方である。この見方では、たとえば日本で生まれ、日本人家庭で生育するものは、周りの大人 (や、すでに日本語獲得を完成した子ども) が使っている日本語を、習慣・しきたりとして身につけるといのである。つまりある種の動物をイヌと呼んだり、空から落ちてくる水滴をアメと称することや、「太郎は描いた絵を本気で」のような単語の結び付け方は使わず「太郎は絵を本気で描いた」を使うことを「正しい」習慣・しきたりとして習得する、という考え方だ。これはまた、多くの人が「言語」について漠然と抱いている見方に思える。

総体主義も、習慣・しきたり主義も、言語を人間の「外側」にあるものとして捉えている点で共通している。これに対して生成文法は、言語を「内側」のものとして捉える。内側、とはどういうことか？ 本書の「序論」は、生成文法が、言語とは個人個人の頭脳の中にある「普遍文法 (Universal Grammar)」(p.53ff 参照) に立脚するものと見ている旨をまず指摘する。続いて、チョムスキーの履歴に簡単に触れた後、彼の思想が、人間の過去・現在の思想の中でどういう位置に属するかを明らかにする。

続く第1章では、科学とは何か、言語を科学として解剖するには、言語を、視覚・聴覚等と同じく、各個人が生まれながらにして頭脳の中に持つ「モジュール」(≒領域固有で自律的な機能) とみなさなければならないことが説かれる。であるとすると、上記の総体主義、習慣・しきたり論は排除されなければならない。

上に、チョムスキー理論がさまざまな変遷を遂げてきた旨を指摘した。この変遷の途中までしか知らなければ、もちろん不十分であるし、最新の理論を知っているだけなら、そこに至る変遷がどういう意味・重要性を持っていたのかがわからない。それを避けるため、第2章では、チョムスキー理論のいわば史的叙述が行われている。かつての生成文法でたとえば $VP \rightarrow V + NP$ のような「句構造規則」を必要とした構造は現行理論ではどのように導かれるのか、そしてそのような理論変化はなぜ必要だったのか、がこの章で述べられる。なお、この章の終わりには進化発生生物学 (evo-devo biology) に関する生成言語学の興味深い考えが紹介されている。

子どもが自分の母語を身につけるのは速い。5歳ころにはほぼ完了する。これはそれ

までに子どもが与えられる資料がごく少なく、指導などはほぼ全く行われなことを考えると、驚異的である。しかし、これを視覚と同一に考えるとどうか？ 人間の子どもは、生後すぐには何も見えない。しかし2ヵ月ぐらいで母親の顔が認識できるようになり、1歳を超えるころにはものを立体的に見ることができるようになる。これはヒトには生まれつき視覚器官が備わっており、大人が「ものの見方」を教えてやらなくとも、視覚が発達するからである。同じように、言語についても、「言語器官」というものが生まれつきにヒトに備わっており、それが言語を発達させるのだとすれば、子どもの母語獲得の速さは驚きではなくなる。視覚器官がどこにあるか、どのような解剖学的・神経生理学的姿を持っているかはかなり分かっている。それに対して「言語器官」は“頭脳の中にある”ことまでは確かだが、実際にどのような原理原則に基づいてどのように働くかを知るには、論理的思考と、子どもの言語習得過程、いったん獲得された言語の病理的原因に基づく崩壊の観察に依るほかない。これこそがチョムスキー言語学の中心であり、第3章の扱うところである。

第4章は、合理主義者であり、メンタリスト（言語現象の根底に心的要因を置く考えの人）であり、自然主義者（言語を自然界の心的実在とみなし、自然科学と同じ方法で説明しようとする人）であるチョムスキーを描く。これと反対の意見を抱く人、すなわち、経験主義者、言語の根底はヒトの心／頭脳の外にあると考える人、言語を自然界の実在とみなさず、それを説明するには自然科学と別の方法が不可欠であると信ずる人々の見解との対比において「チョムスキー哲学」を学ぶ良い機会がここにおいて与えられている。

原著には最終章としてチョムスキーの政治観を扱った第5章「言語と自由」がある。これも極めて優れた考察であるが、これを訳出対象とすると600ページをはるかに超える大著となってしまう。そこで彼の政治観については他の数多くの文献にまかせ、本訳書は彼の言語理論のみに絞ることにした。それに伴い、「文献」では特に第5章だけに関係する文献は省いてある。

スミス、アロットの2著者は、頭脳明晰であり、名文家であり、チョムスキー理論に関するその理解は深くかつ幅広い。しかし彼らとて人間である。原著の中には、訳者をして「ここはこのように書き換えたら、読者にとってより分かりやすく、あるいは誤解を与える可能性が低くなる」と思わせる箇所がいくつかあった。訳者がこれらの件について2著者に指摘を行ったところ、この上なく謙虚で良心的な反応が返ってきた。そのほとんどすべてが訳者の指摘を肯定するものであった。その意味で、本書の読者は原著より分かりやすい訳書を手に行っていることとなる。

訳出にあたってとくに心がけたことは、原著書の意図をできるだけ正確に、そして分かりやすい日本語で表現することであった。言うまでもなく、4人の訳者は各自担当の部分にだけ注意を集中したわけではなく、本全体に関して原著者の意図、読者にとっての分かりやすさ等々について互いに意見交換・討論を行った。この討論でやり取りされ

たEメール数は数えるいとまもない。専門用語の訳語については、できるだけ標準的なもの、広く使われているものに従うようにした。ただ、ひとつだけ例外がある。それは、チョムスキーが、conceptual-intentional interface や conceptual-intentional system と言うときの intentional の訳語である。これは、通常、「概念-意図インターフェイス」「概念-意図システム」のように「意図(的)」と訳されている。しかし、訳者らは、その訳語で本当に良いのであろうかと疑問に思った。これは、むしろ、哲学者ブレンターノ以来の伝統で、aboutness に関する現象と捉え、「志向性」の訳語を当てるべきではないかと考えた。そして、念のためにチョムスキー本人に確認したところ、やはり、「哲学的な意味での志向性」の意味であることがわかった。したがって、本訳書では、「概念-志向インターフェイス」「概念-志向システム」の訳語を使うことにした。

なお、原著書の本文には1節、2節といった節番号や小節見出し番号がないため、節立ての階層性がわかりにくくなっている。そこで、本訳書では、原著書にはない節番号や小節見出し番号を入れた。また、本文末の「原注」に加え、「訳注」を各章末に載せた。

訳稿の完成までにはここにお名前を書ききれないほど多くの知人・友人にお世話になった。とくに訳稿を丁寧に読み、貴重なコメントを下された諸氏に感謝したい。本訳書の出現については、そもそも版元との条件(=第5章省略)付き契約締結の段階から最終段階に至るまで新曜社社長・塩浦暉氏のお世話になった。深い感謝の意をここに捧げたい。

平成30年秋

訳者一同

第3版への序文

本書の再版が出てから10年以上経つ。この10年は世界を取り巻く様々な危難が増大した期間であるが、言語学と認知科学が著しく成長した時でもあり、チョムスキーも、それまでと同じように先鋭的な理論的貢献を続けていた時期であった。チョムスキーの旺盛な学問的活動は、時間とエネルギーの大半を政治活動と、産業界と政府の巨大な範囲にわたる虚言や意図的混迷化を暴くことに捧げる中で行われたのである。

こうした展開を理解・説明し、チョムスキーの継続的活動を正しく捉えるためには、著者の専門的知識の幅を広げる必要があると考えられた。そこで第2版までの著者・スミスはアロットの協力を得ることとなった。アロットはこの目的に必要な知識と経験を兼ね備えていたのである。

我々(スミスとアロット)は、今回も本書の基本的な輪郭には変更を行わないこととしたが、その一方で、この10年間の新展開の理解を進歩させる材料と、これらの進歩においてチョムスキーが果たした役割を示す材料との双方を本書に反映させる目的で、アップデートと改訂を本書に施した。以前の版に誤りがあることが判明した場合はこれを訂正し、不明瞭であった部分を説明等により明らかにした。またこの10年で最も傑出した革新であると我々が判断したものを強調的に表示した。この結果、第1章については、多少の確証的証拠を加えただけで、ほとんど変更を加えなかったが、他の章ではこう単純には行かなかった。言語学の中では、動乱と言っていいほどの活動が続いていた。ミニマリスト・プログラムは生成文法的陣営では相変わらず支配的パラダイムであるけれども、このプログラムには大幅な変化が生じていた。これに従って、第2章には変更と増補が施され、現行理論の時に不明瞭な理論的・形式的新機軸をもっとわかりやすく説明する試みが盛り込まれた。チョムスキーは現行の統語理論に対して理論的貢献を行っており、それについては我々も詳しく説明することになるが、それに加えてチョムスキーは、最近の学問的業績の大半を言語能力の進化の研究に捧げている。これに伴って我々も、以前の版では比較的短かったこの問題に関する論考をくわしく精巧なものとした。

言語の心理学と心理言語学の分野で最も重要な変遷は、チョムスキーが公準として唱える「普遍文法(UG)」に対する一層の、そして一層敵意を増した反発と、これに代わるべき考えとして提出されている、コネクショニズム等の「創発的」理論の出現である。第3章ではこれらの代案のいくつかを吟味し、その主張を解剖し、しかるべき裁断を与えている。この論争は、「刺激の貧困」を巡る論議の本質と解釈を巡るより広い意

見不一致の一部をなすものである。「刺激の貧困」については、第4章で哲学的實在論の観点から再び吟味する。この章ではまた、哲学界におけるチョムスキーの業績誤解の多くの原因となったと思われる用語上の、また実質上の複雑さについて、前回よりも紙数を割いて説明を行っている。その中には、「知識 (knowledge)」、「(心的) 表示 ((mental) representation)」、さらにチョムスキーが拒絶し、それゆえに悪評を買っている「語と世界」の意味的關係が含まれている。

チョムスキーの執筆の豊饒さには尽きるところがない。本書のアップデートされた参考文献には、チョムスキー自身による50ほどの新たな論文・書籍のほか、ほぼ同数の他の人による新文献が入っている。派生的文献は今や膨大なものである。この中には統語論、音韻論、意味論という専門領域に関する文献もあるが、それだけでなく、チョムスキー自身およびその業績にほぼ限って捧げられている定期行物の特別号も含まれている。この領域に属する最近の有用な著をあげると、Al-Muraiti (2014), Barsky (2007, 2011), Bricmont & Franck (2010), Collins (2008a), McGilvray (2005), Piattelli-Palmarini & Berwick (2013), Sperlich (2006) がある。さらに、彼のウェブサイト (www.chomsky.info) には大量の有用な資料があるし、彼が尽きることのないインタビュー要請に応じているため、このウェブで「アフガニスタン」や「ISIS (Islamic State of Iraq and Syria : イスラム過激組織)」から「シオニズム」に至るまでのチョムスキーの考えに接することができる。続けるときりがない。

初・再版で触れた方々に加え、次の方々に、コメント、交信、質疑、断続的ながら憤激に対して感謝の意を表したい。クラウス・アーベルス (Klaus Abels)、エリーヌ・ブッシュ・グンダーセン (Eline Busck Gundersen)、ティモシー・チャン (Timothy Chan)、アナベル・コーマック (Annabel Cormack)、ヤン・テーリエ・フェールンド (Jan Terje Faarlund)、クリステル・フリッケ (Christel Fricke)、カーステン・ハンセン (Carsten Hansen)、ジョナサン・ノウルズ (Jonathan Knowles)、アド・ニールマン (Ad Neeleman)、アンダース・ネス (Anders Nes)、ジェシカ・ペップ (Jessica Pepp)、ジョルジュ・レイ (Georges Rey)、マーク・リチャーズ (Marc Richards)、アマール・スミス (Amahl Smith)、マルコム・トッズ (Malcolm Todd)、ヒロユキ・ウチダ (Hiroyuki Uchida)、ハンス・ファン・デ・コート (Hans van de Koot)、セバスチャン・ワツル (Sebastian Watzl)、ユハニ・イリ＝ヴァクケリ (Juhani Yli-Vakkuri)。マーク・リチャーズには、第2章の原稿に関するこちらからの質問や、あちらからのコメントに対して、ヤン・テーリエ・フェールンドには、第2章に対するコメントに対して、ジョルジュ・レイには、本書全体に関するコメント、疑義、そして極めて価値の高い討論に対して、特別の謝意を表したい。これらの方々の示唆に関して、我々が書いたこと、書かなかったことについての責任はこの方々にはない。スミスは、前と同じくその家族 (セアラス、アマール、アン (Anne)、ザック (Zak)、ジョシュ (Josh) ; アイヴァン、ジャネック (Janneke)) からの愛、支援、

そして専門的助言に対して恩義を感じている。アロットは、研究センター CSMN（ロンドン大学の Centre for the Study of Mind and Nature）の同僚に、研究プロジェクトである The Reflective Mind（非思慮行使的な精神活動）に、双方に資金を提供したノルウェー国立研究評議会に、そして何よりも、妻ジューイ・チュー（Jui Chu）の愛情と、忍耐と支援に感謝をささげたい。

再版への序文

本書の初版を出してから5年間にはいろいろなことが起こった。言語学には進歩が続き認知科学が爆発的盛りを見せた。世界は一層危険な場所になったし、チョムスキーは学者と政治的活動家という二面的存在のリーダーでありつづけた。

こうした変化のすべてに対処するのは不可能である。そこで本書の基本的な輪郭には変更を行わなかったが、数々の追加や変更を加えた。第一に、気付いた誤りは訂正し、不明瞭だった箇所は説明等により、明快になるように努めた。第二に、私の力の及ぶ限り、注や参考文献をアップデートした。ここで扱われている諸分野のすべてについて大家・達人であるなどという人はいないので、私は、チョムスキーの最近の理論が直接の関係を持つ章や節をアップデートすることを中心とした。その結果、参考文献にはチョムスキー自身の書いたものだけで40点ほどの新しい作品が加わることとなった：15冊以上の新刊書と改訂版に加えて25点の新論文である。それと同時に、チョムスキーに関する言わば派生的な文献も数多く出現していた。そうした著作の代表的なものを挙げれば、Antony & Hornstein (2003)、McGilvray (1999)、Michell & Schoeffel (2002)、Winston (2002) その他数多い^[1]。こうした文書の他、ほぼ100点の項目が同様に参考文献に加えられ、関連性に依拠して、これらの新記載項目に言及するための注を加えたため、注もまた増大することとなった。

第三に、1998年以降、言語学界と世界がどのように変わったかが明らかになるような工夫を凝らした。チョムスキーはそれ以前と同じように言語学における先駆的業績を生み出しつつあったので、私は第2章の関連のある箇所を校閲し、これに応じてミニマリズムの発展に対する論議を追加した。このことの必然的結果として、初版のかなりの部分——それは今や舞台の中央に位置することとなったいくつかの問題について、私が必要な基礎を配置しておかなかった箇所であった——を修正する必要が生じた。私はまた進化に関する論考をアップデートした。進化は、チョムスキーが興味深い新しい論説を展開し始めたもう1つの分野である。これらの改訂と内容増大はこの本全体にわたって他の細かい変更を必要ならしめた。

初版の場合と同じく、今回も同業者・友人諸氏のコメント・批判・訂正勧告から大いに利益を受けた。元の謝辞で述べた方々に加え、今回は特に次の方々の御意見にお

[1] Michell & Schoeffel (2002) は、チョムスキーとの討論を編集・謄写したもので、本書の参考文献目録では Chomsky (2002b) として記載してある。

礼を申したい。すなわち、ミシ・ブロウディ (Misi Brody)、ディック・ハドソン (Dick Hudson)、アネット・カーミロフ＝スミス (Annette Karmiloff-Smith)、コリン・フィリップス (Colin Phillips)、ポール・ポウスタル (Paul Postal)、ジェフ・プラム (Geoff Pullum)、および書評者中のマーティン・アトキンソン (Martin Atkinson)、ゲアリー・ミルサク (Gary Milsark)、そして特にフィリップ・カー (Phillip Carr) である。かなりの確率で確かだと思われるのは、この中で私が彼らの貢献をどのように扱ったかについて完全に満足している人は1人もいないという点だ。改訂された原稿をすべて読み、それにコメントを与えてくれたことに対し、ニコラス・アロット (Nicholas Allott)、アナベル・コーマック (Annabel Cormack)、そしてアン・ロー (Ann Law)、に特別の謝意を表したい。初版の原稿に対してはチョムスキーから膨大なコメントをもらい、彼は後に、自分は私 (= スミス) の書いたことの全部に賛成しているわけではないが、深刻な反論はまったく抱いていないと私に告げた。チョムスキーは今回の改訂版を見ていない。だから彼の考えと理想に関する私の解釈について彼は何の責任も持っていない。

いつもと同様、私の家族と友人から受けている愛情と支援に対する謝辞を述べるのは、誠に嬉しいことである。

初版への序文

私が負っている知的および私的双方の恩義の中で、最大のものは、ノウム・チョムスキーに対するものである。チョムスキーの業績と、彼が与えてくれたインスピレーションがなければ、私の専門家としての生涯は本質的に違ったものになっていたであろうし、この本も、当然ながら、存在しなかったこととなる。さらに加えて、彼は、自らが抱える他の膨大な献身の圧倒的なプレッシャーにもかかわらず、私と口頭と交信による意見交換をする時間を何年にもわたって都合してくれた。私が本書の最終原稿より前のバージョンを彼に送ったところ、彼は60ページにもわたるコメントや参考意見でこれに答えてくれた。これにもかかわらずいまだに私が彼の考えを不正確に伝えていたとしたら、それがどんな点に関したものであれ、チョムスキーのせいではない。チョムスキーの陰に隠れつつ仕事をするのは名誉なことであった。

何人もの同業者・友人が、5年以上ほどにわたってこの本の内容の全部ないし一部に関する審議、討論に加わってくれたので、私はこの本に注意と労力を集中することができた。そうした同業者・友人の名を次に挙げれば、ステファニー・アニヤデイ (Stefanie Anyadi)、ミシ・プロウディ (Misi Brody)、ロビン・カーストン (Robyn Carston)、レイ・カテル (Ray Catell)、タウン・ホウクストラ (Teun Hoekstra)、リタ・マンジーニ (Rita Manzini)、ミレーナ・ヌーティ (Elena Nuti)、イアンティ・ツインプリ (Ianthi Tsimpli)、ハンス・ファン・デ・コート (Hans van de Koot)、ニジェル・ヴァンサン (Nigel Vincent)、そして特にアナベル・コーマック (Annabel Cormack) とディアドリ・ウィルソン (Deirdre Wilson) である。言うまでもなく、これらの諸氏は私の書いたことを支持する人々であると決め込まれるべきではなく、また私が諸氏の助言を時に聞き入れなかったからといって、彼らが責められるべきではあり得ない。我が家族——アマール (Amahl)、アイヴァン (Ivan)、セアラス (Saras)——に触れるならば、彼らは優れた助言、心からの激励、そして美味しい食事で私を鼓舞し、支持してくれた。

この本の一部は、私が英国学士院研究基金の給付を受けている期間に書かれたものであり、この期間は勤務先のロンドン大学ユニヴァーシティー・カレッジからサバティカルによって離れる期間と一致していた。また、ユニヴァーシティー・カレッジ人文学科学長からは、マサチューセッツ工科大学に奉職するチョムスキーを訪問するための費用を支給された。英国学士院とユニヴァーシティー・カレッジからの支援と、私の出張中その任務を肩代わりしてくれたカレッジの同僚に対して謝意を捧げたい。

目 次

訳者まえがき	i
第3版への序文	v
再版への序文	ix
初版への序文	xi
序 論	1
1 チョムスキーの業績	1
2 妙想と影響	6
訳注	8
第1章 心の鏡	9
1 序 説	9
2 科学としての言語学	10
2.1 理想化の本質	15
2.2 コモンセンス	21
3 モジュール性	22
3.1 機能分離の二方向性	28
3.2 モジュールと準モジュール	33
3.3 知能と学習	34
4 言語能力と言語運用	35
4.1 言語能力と文法	36
4.2 規 則	37
4.3 I言語とE言語	39
5 言語運用、統語解析、そして語用論	44
5.1 統語解析的考察	45
5.2 語用論的考察	47
5.3 言語能力と言語運用 対I言語とE言語	48
6 進化と生得性	49
6.1 言語獲得	51
6.2 刺激の貧困	51

6.3 語の意味	53
6.4 普遍性	55
7 自然言語と思考の言語	57
8 要約	61
訳注	61

第2章 言語の基盤 67

1 序説	67
1.1 何が達成されたか？ — 3つの妥当性	68
1.2 ミニマリスト・プログラム	69
2 言語の知識	70
2.1 レキシコン	70
2.2 構造の知識	73
2.3 構造関係の知識	75
3 記述的妥当性	78
3.1 形式的背景	78
3.2 表示レベル	78
3.3 構成素と規則	79
3.4 深層構造	82
3.5 記述対説明	85
4 説明的妥当性を目指して	87
4.1 規則から原理へ	87
4.2 句構造規則の廃止	93
4.3 X ^{bar} 理論	94
4.4 統率・束縛理論	97
4.5 変形の地位	113
4.6 原理とパラミタ	115
4.7 語彙範疇と機能範疇	117
5 説明的妥当性を越えて	122
5.1 ミニマリズム (極小主義)	122
5.2 スパルタ式言語学 (Spartan linguistics) — ミニマリズムの成分	123
5.3 経済性	124
5.4 (実質上の)概念的必然性	127
5.5 第三要因の考慮	128
5.6 実装	131

5.7 完璧な統語論	143
6 棚卸し — 歴史的経過	144
6.1 進化	146
6.2 第三要因	150
訳注	150

第3章 ことばと心理学 153

1 序説	153
2 因果関係と説明	156
2.1 理論とデータ	157
2.2 行動主義	159
3 心理的実在性と証拠の性質	161
3.1 「心理学的」または「言語学的」証拠？	161
3.2 直観	165
4 言語処理	175
4.1 複雑性の派生理論	176
4.2 文法と統語解析器	179
4.3 解析問題	184
4.4 経済性	187
5 言語獲得(プラトンの問題)	190
5.1 教えるのか、それとも教えられることなしに学ぶのか	191
5.2 学習か成長か	192
5.3 パラミタの設定	193
5.4 臨界期仮説	196
5.5 成熟	200
6 言語病理	203
6.1 脳梁発達不全	204
6.2 多言語使用の天才	205
6.3 特異言語障害	206
7 行動主義者の反撃	209
7.1 コネクションイズム	209
7.2 構成主義と統計的学習	213
7.3 創発主義	221
8 結論	230
訳注	233

第4章 哲学的事在論

—— チョムスキーが与^{くみ}する立場とそれをめぐる論争 —— 237

1 序 説	237
2 チョムスキーが与する立場	244
2.1 心についての事在論	244
2.2 生得的構造	252
2.3 方法論的自然主義	254
2.4 再びI言語について	255
2.5 表示と演算	257
2.6 心理主義	261
2.7 合理主義と言語の知識	261
3 チョムスキーをめぐる論争	271
3.1 言語についての内在主義	271
3.2 言語についての外延主義的見解	274
3.3 言語とコミュニケーション	282
3.4 意味についての内在主義	290
3.5 生得性	297
3.6 心身問題	309
3.7 統一化と還元	310
4 結 論	312
訳注	313
原 注	317
文 献	361
人名索引	397
事項索引	405

装幀 = 新曜社デザイン室

序 論

啓発の子。

(Chomsky, 1992a: 158)

1 チョムスキーの業績

チョムスキーの重要性はどこにあるのだろうか？ 彼は、我々が耳にする無数の言語が持つ膨大な複雑性が、単一の主旋律とも言うべき「普遍文法^[1] (Universal Grammar)」の変奏曲にはかならないという見方を示した。チョムスキーは言語学に革命を起こし、そうすることによって知の仕組みに関する考え方に波乱を巻き起こした。すなわち、生得観念の考えを復活させ、我々人間の知識の重要な部分は遺伝的に決定されたものであることをあきらかにし、何世紀も昔からありながらその頃には不評になっていた合理主義的見地を復活させ、「意識されざる知識^[2]」なるものが、言葉を話し理解する我々の能力の基礎となっている証拠を提供した。彼は心理学を支配していた行動主義的流派を打倒する上で主要な役割を果たし、心^[3]に、人類を研究する上での卓越した地位を再び与えることとなった。一言で言えば、チョムスキーは我々人間が自分自身を見る目を変えたのであり、その意味で、思想史の上でダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-1882) やデカルト (René Descartes, 1596-1650) に匹敵する地位を得ているのである。しかもチョムスキーがこの役を果たしたのは、反体制的な政治論や実行動に自分の時間の大半を捧げながらのことだったのである。彼は政府の吐いた虚言の証拠を示し、大企業の隠微な圧力行使を暴露し、社会秩序の規範を創出し、西側諸国の良心としての立場を築いたのであった。

近年の歴史の中でチョムスキーと同格の影響力を行使した人としては、アインシュタイン (Albert Einstein, 1879-1955)、ピカソ (Pablo Picasso, 1881-1973)、そしてフロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) が挙げられる。これらのさまざまに異なるタイプの人物それぞれとのあいだに、チョムスキーは類似点を持っているのである。フロイトと同じように彼は — チョムスキーの方が一段上の知的厳密さを以てではあるが — 心に関する我々の概念に変革をもたらした。アインシュタインと同じように、チョムスキーは深遠な科学的創造性と急進的な政治的活動とを混在させている。ピカソと同じように、チヨ

ムスキーは自分自身が一旦確定させた体系を、驚くべき頻度で打ちこわし新しい体系に交替させた。この聖体破壊のもっとも新しい例——チョムスキー自身の「ミニマリスト・プログラム」——は、言語機能の生得的基礎が持つ豊饒さを立証しようとしたチョムスキーによる以前の業績理論のうち、かなりの部分に疑いを差しはさむものであったが、それは自らの理論を一層健全な基礎に置くことを目的としたものであった。チョムスキーが最大の相似性を持つ対象は、バートランド・ラッセル (Bertrand Russell, 1872-1970) かもしれない。ラッセルの初期の著作『プリンキーピア・マテマティカ (Principia Mathematica : 数学原理^[5])』が数学の基礎を再定義した一方で、ラッセルはその生涯のかなりの時間を政治的著書と政治的活動に捧げた。ただ、数学については誰でも多少のことは知っているのに対して、人々が言語学について多少とも知っているとするれば、それは、多くの場合、チョムスキーの影響である。チョムスキーの言語学、哲学、心理学における名声が非常に高かったため、最初の頃から彼の政治観に耳を傾ける人の数を、ある程度とはいえ、保証した。やがて月日が経つと、彼の政治論上の名声、あるいは悪評が、彼の学問上の業績に人々の注目を集めるようになってきた。チョムスキーの学問業績は言語研究を科学的探究の主流の位置に置き、同時に言語研究をそれ以外の人文科学、並びに自然科学にとって必要不可欠のものにするに至ったのである。

本書は伝記ではない。我々著者はチョムスキーの思想に関わっているのであり、彼の個人生活の詳細に関心を持っているのではない。彼の人生に興味がないというわけではない。何人かの人によるチョムスキーとのインタビューからは、子どもの頃学校の先生と一緒に野球を見に行ったときの話とか、ハイスクール時代にボクシング習得を強制されたときの気持ち^[5]など、実に面白い挿話が惹き出されてくる。だがチョムスキーは「本質的に真の修道者^[6]」であって、自分の個人的見解は自らの科学的概念とは無関係であり、それどころか「ある主題が重要であって考究に値するのであれば、それは個人的な問題にすり替えられてはならない」と繰り返し強調している。次のパラグラフ以降に述べる数少ない個人的眇見を超える事柄を知りたい人には、バースキー (Robert F. Barsky, 1961-) の本や、バーセイミアン (David Barsamian, 1945-)、マクファークア (Larissa MacFarquhar)、ペック (James Peck) らによるインタビュー (参考文献を見ること) が良い源泉となるだろう。

チョムスキーは1928年12月7日生まれである。2歳のときから10年間、フィラデルフィアにある進歩的なデューイ式学校^[7]の1つで過ごした。このタイプの学校では個人の創造性の重視に対する共鳴性があった。この学校に次いで、チョムスキーは管理の厳しい窮屈なハイスクールに進んだ。このハイスクールについてチョムスキーは「ほとんど何も」覚えていないと主張している^[8]。このあと彼はペンシルヴェニア大学に籍を置きゼリッグ・ハリス^[9] (Zellig Sabbetai Harris, 1909-1992) に師事することとなる。ハリスは当時指導的な言語学者であり、また政治論者であった。チョムスキーに深い影響を

与えた。この大学でチョムスキーはまた哲学者ネルスン・グッドマン (Nelson Goodman, 1906-1998) の影響も受けた。グッドマンもまたチョムスキー理論の成立にとっての重要人物であった。チョムスキーは 1949 年にペンシルヴェニア大学を卒業した。卒業論文は現代ヘブライ語についてのものであった。この論文はのちに改定・拡張され、彼の修士論文となった^[10]。同年、彼はキャロル・シャッツ^[11] (Carol Schatz, 1930-2008) を妻に迎えた。キャロルはチョムスキーの大学での同窓生であり、独自に言語と言語学に重要な貢献をした。彼女は 2008 年 12 月の死に至るまでの 60 年近いチョムスキーとの結婚生活をとおして、夫のためにこの上なく重要な役割を果たした。2 人の結婚後まもなく、チョムスキーは大学院に進み、1951 年にはハーヴァード大学の超優秀初学生会 (The Society of Fellows) の一員となり、そこから 1955 年にマサチューセッツ工科大学 (MIT) に移った。以来彼はずっと MIT に籍を置く。もっとも毎年のかんりの日数を世界各地を回り講演を行ったりインタビューを受けたりすることに捧げているが。

2014 年、独り身としての何年かを過ごした後、チョムスキーはヴァリーリア・ヴァッサーマン (Luisa Valéria Galvão-Wasserman, 1964-) と結婚した。このことをチョムスキーは「望外の喜び」と言っている。ヴァリーリアはブラジルのサンパウロ大学高等学術研究所 (The Institute of Advanced Studies : IEA) およびその学内広報誌 *Estudos Avançados* (高等学術) の翻訳係であり、また、映画のプロデューサーやさまざまな文化的行事の組織役としても活躍している。

チョムスキーによる主要な影響は言語学、哲学、心理学に対するものであるが、彼はまた人類学から数学、教育から文学評論に至るかなりの学問領域に対してもいくらかの、しかし重要でないとは決して言えない作用を与えている。これほど広範囲な影響力を理解するには、チョムスキーの生成文法という科学研究計画の定義的特徴を把握し、また彼の社会的・政治的アピールを深く洞察することが必要である。これから先に述べることは、チョムスキーの業績を、彼が言語の研究と心の研究において果たした中枢的貢献を分析し、背景に照らして理解しようとする試みである。これを試みるということは、言語学、心理学、そして哲学に関するかなり専門的で深遠な問題点を扱うこととなる。

言語学・心理学・哲学の 3 分野にわたるチョムスキーの業績は、当初から今日にいたるまで、体系的に革新的であり、体系的に論争を呼ぶものである。彼の見解についての正真正銘の異論も、単なる誤解も、この 3 分野の学者たちのあいだに広く存在するので、我々の目的の一部は、なぜ彼の言い分が過度と言えるほど称賛される一方で中傷的と言えるほど悪く言われるのかを説明するところにある。ある場合にはこの説明は簡単につくが、他の場合は彼への敵意がなぜこれほどの無理解に基づくのか判断に苦しむ。正真正銘の異論に属するのは、言語学というものが、心理学的な、それゆえ究極的には生物学的な企てであるのか、それとも数学的あるいは社会学的企てであって、諸言語の母語話者の直観の重要性が必然的に付随するものであるのか、に関する意見の相違に基づく

ものである。同じように、言語研究には厳密な形式化と確率モデル理論が不可欠なし望ましいのか否か、言語研究者は自分たちが研究している言語から得られるデータを余すところなく扱うべきか、それとももっと限定された領域についての洞察を得ることで満足すべきかについて、意見の違いが存在する。また政治論について言えば、現在の社会より良い社会をあらかじめ綿密に計画することにどこまで意味があるかについての意見の相違がある。単なる誤解に属するものとしては、チョムスキーのことを「言語学において見せかけの芝居を打っている」とか、「虚偽にしがみついているのだ」^[13]とか、意図的に虚言を弄しているとか、ポル・ポト^[訳注4] (Pol Pot, 1928-1998) やクメール・ルージュ^[訳注5]の代弁人だ等々の酷い悪口がある。

この本は、誰にでも読めるようにとの意図で書かれている。そのためすべての注には細かい参考文献、引用等の原典、説明、短いが入念な説明、さらに読むべき文書の示唆が付いており、すべて巻末に集められている。すべての引用原典は注で分かるようになっており、原典を探すのにはごく短い時間しかかからないはずである。チョムスキーの著作の多くはきわめて専門的なので、我々は彼の考えを紹介するに当たっては、分かりやすさに資するよう、できるだけ容易な言葉遣いを心掛けた。とは言っても我々は、チョムスキーの考えをできるだけ正確に伝えることを志し、必要な場合は術語をあえて使うことを厭わなかった。使う場合はもちろん説明を加えてある。どの場合にも、我々が取り上げた言語に関する例は、その例の持つ意義を真に把握するためには熟考の要があることを強調しておきたい。

第1章は言語と言語研究を、人間の本質の科学的探究の一部という、より広いコンテクストの中に置くことから始まっている。これは人間の心の構造を論議することである。これは、人間の諸機能からの健全な機能分離と病的な機能分離の双方に関する研究から得られた証拠を論議することであり、言語を「心の鏡」と視ることにほかならない。それに続く第2章ではチョムスキーの言語の理論化についての詳細なかつある程度史的な注解が行われる。これが他のすべてを構築する基本である。この章の目標はチョムスキー理論の現況を、それがどうして今の姿をとるようになったかある程度読者に分かってもらうところにある。チョムスキーの考えの中でもっともよく知られているもの（たとえば深層構造と表層構造）を取り上げ、それがなぜ現在のミニマリズムの枠組みの中には繰り込まれていないのかが説明される。もっとも重要なのは、チョムスキーがこれまでの50年にわたってどのような傾向の論証法を用いて来たか一端を我々が示そうとしている点である。その後の2つの章はチョムスキーの業績の心理学的および哲学的意味合いを述べることに捧げられている。

第3章は心理的実在とは何を意味するのかという難題を扱う。そしてその証拠を、言語処理、幼児の第一言語獲得^[訳注6]、病理における言語崩壊の探求から求める。この章の核心をなすのは、チョムスキーの言う「プラトンの問題 (Plato's problem)」^[訳注7]、すなわち子ども